

古今圖書集成

卷

彙編

1卷5  
552



門 1 卷 5  
第 552  
卷



無名氏

準菴山上有誠錄

適逢今日暇。命駕大城東。園木魚隣尉。海潮與沼通。  
波吞兩岸石。魚該一絲風。暫免簪纓累。放情似釣翁。  
右酒井讚岐守公於乙卯作

松平大和守様

おちあして袖に涙のあつ時。可もてぞ知る人の実を。  
尼よある時。松平讚岐守頼重公御娘子  
古々の人おかしをづかや。あまきはゆめを漆のそで

西行法師

きをすくきまゝ人よ道のぬらぶあしぞゆゑんあしぞゆゑん

佛ありぬぬのころひよ死ねを仏と人をいひあはる

極市地獄に生ていふ内ぞまゝてまゝあまのあまのあまの

寶曆十四甲申年 浅草山人金翠建之

いれち〜今まゝ人や夕様 笠窓巨山

冠月菴星員

歌よみて月をむねありこころ様の口かゝるゑるか次第

授句作字錢當酒。錢到手時酒到口。酒到口時錢又  
罄。但願百年醉不醒。近来何复之酒錢。三日五日醒  
如綿。請着面目痴不痴。

亀田鵬齋

狸の腹鼓之画みてよきる

蜀山人

太まの法代と謡や腹つゝみたんたぬきち、あきをぬる

題考〜

同人

入おまゝ秘の火入をつき出せをいつゝも同一日かゝるあり

河豚贗

吉益周介

獸名而魚。毒之何神。毒々于毒。不毒于人。

燈臺序 并贗

夫以彼湯臺ニテハお寺の坊様ガ死金を蓄屍を  
 有リ此燈臺もても無光嚴寺の蠟燭ハ死期をな  
 う屍をさしに古言を引證すルハ砒白湯燈借音  
 ツサナント無理でも何んぞいガ子然トそれトヤア  
 四角たゞ々々つむろ諸夏満圓ハ湯来哉燈々兮初  
 山産物圓得利隅カラ隅迫スツバト突つてルッ  
 モシ甚傳會の処ハ諸彦トスゾ御免ナセヒ灯挑寺  
 ト云尔  
 是ジキア何んより寺つゝ免で忌諱たゞ々お  
 目出度景物の贅曰

燈臺の下閣しゆ匠の技を駿河細工の手除見事よ  
 維時文化十有一年甲戌孟春望志よさいの中橋  
 山洞饗膳先生癸會之辰  
 脾胃田町の什人前獨で啗ふ兄さん食停茶禁  
 甘白ニカツテマウス辛田五  
 又化十三年子三月十八日  
 尚齒會  
 加藤遠江守内 菊池貞翁 百三歳  
 御臺所組頭 田中權十郎 百歳

御拔木同心 石崎源八百 百歳

御鷹匠同心組頭 櫻井喜内の 九十九歳

神保臣盛會 田中延壽齋の 九十四歳

田沼玄蕃頭臣三 龜山一 九十二歳

與力 矢野三無の 九十二歳

永井飛彈守臣 市川了和の 九十一歳

山崎催主夫 本多隨翁の 九十三歳

山崎催主夫 本多隨翁の 九十三歳

山崎催主夫 本多隨翁の 九十三歳

山崎催主夫 本多隨翁の 九十三歳

兩國柳橋萬屋八郎兵衛方言 大酒大食之會興行  
連中之内拵人之分書按左之通

酒組 芝 鯉屋利兵衛三十二

三升入盃言 六盃半 小田原町 堺屋忠兵衛六十八

同 三盃 小田原町 堺屋忠兵衛六十八

下畧

菓子組

饅頭五十 羊羹十 掉神田 丸屋勘左衛門五十六

薄皮三十 餅八十 松三十 介堀 糸屋清兵衛六十五

饅頭三十 餅八十 松三十 介堀 糸屋清兵衛六十五

米饅頭五十 鹿子餅百 麴町 佐野屋彦四郎二十八

茶五 杯

下畧

飯組

常之茶漬茶碗  
菜漬香之物

飯六十八碗

小日向

上総屋次左衛門 四十九

同五十四碗

浅草

和泉屋吉藏 七十二

下畧

鰻組

筋之鰻 金壹兩三歩

本郷春木町

芳屋芳左衛門

中筋鰻 金壹兩貳歩

深川伊町

万屋甚兵衛 十三

同 金壹兩貳歩

浅草馬道

岡田仙藏

下畧

蕎麦組

五十七盃 新吉原

桐屋惣左衛門 四十二

六十三盃 池之端

山口屋太郎兵衛 三十八

八寸重箱九盃半

外豆腐汁三ツル

吉左衛門 六十八

其外畧

文化十四年丑三月興行也

蜀山人

観世さんひのみかむらひで火を吐てのおそろやちんねんの音

有德院様時分木村友之進コノ本草家アリテ祐  
天上人ノ台火葬ノ節残りレヲ妄語戒ラタモ  
テタル故トレ夏ナレレ友之進見ル曰必祐  
天上人モテ好ナルベシトレ夏ニ常ニ糯米ヲ  
食者必台猶存ト申サレタリト或人ノ詔テ承

福俊號妻乃愚老之妹春來患寒疾既病殆危矣  
山子設振赭鞭折肱之勇而芟其病根再得謀酒食  
也俊號喜而不勝感謝聊設小奠濁醪於茅堂欲乞  
一夕之醉令僕通其意故作寸楮以請焉但 歸適

不在後辱返簡豚兒紛冗忘失寘ニ於筆硯間三日  
得則會期已過矣多罪不知所辭幸賜憐恕因賦已  
調以謝如左式主文

良藥回春瘦骨肥秋來共菊壓霜威誰言延壽南陽  
在初識仙方匕下揮

右  
呈山上賢弟座右

晉老夫拜稿

自領湯液總三四日眠卧如故飲食復常小腹之痛  
梗淡之便一盞痊於一盞譬若白兩已過雷公叔怒

震激之聲漸輕漸遠斷雲之中僅殘電光但休藥之  
可否俟來日下之一胎耳感荷

七月六日

田海藏再拜

洞菴山國手足下

池守秋水旧款

準菴旧款

故醫伯龍渠先生文

散文

先生之罹病也以寬政乙卯之夏彌留大漸遂至

嗚呼哀哉

易簣也嗣子子設甫十二次子尚數歲孺人有

遺腹何其天屬之薄也龍也不肖辱通家之誼又

幼喪父幸蒙

先生之庇而得不孤矣書也則奉其教數也則授

其術其於經學文章也雖未誌曉其義亦昏

先生之誘掖也宜惟此病則請治療窮則仰振卹

一則先生二則

先生而一旦奄然見背則龍也將悵々乎安適日

月荏苒廿三年于今矣子設克續先業其術益

精使人咸曰



先生有子焉

我邦僧家多以三七之數為祭祖考之週歲矣今茲丁丑八月望為其期也子設乃請僧修祭以盡追孝之誼焉夫樹欲靜風動之子欲養親不待嗚呼天若假

先生十年之壽則雖不及觀子設今之盛而猶且知不辱其徽音也何其天屬之薄也昔人之怨天不仁宜乎龍也不肖荷

先生之厚已過所生則又豈設薄奠而祭焉亦不幸為俗眼所白流播落魄無資力可如何嗚呼哀

哉詩曰欲報之德皇天罔極請以此為祭辭

門人向池守龍謹撰

山上氏

名有誠

字曰子設

禮經解規矩設不可欺以方園

寬政十二庚申歲

六月之吉

山義成拜贈

訓アリノブ

女藝者論

手柄岡持

儒者を儒と云、醫者を醫と云へば、藝者をも、藝と  
 斗云へきを、べいりや、浪うても、下の字を呼んで、  
 者こびり、あやれるとも、藝者こ云へども、外は  
 べいりあり、唄浄まり、三弦のまげいあるを、其藝  
 も、素人をも、逞うもおろ、皆下手屎あるは、儒者  
 醫者の類ひも、いりごと、藝者ありて、藝あるは  
 ば、藝を取テ、者と斗り云ありこそ、此説非也、思ふ  
 へ、或人云、此説甚非、藝者ノ藝、何ぞ音曲のそな  
 らん、今江戸は、有こめる、藝者多ク、六藝は通

たる者共、孔子の弟子、三千ニシテ、六藝ニ通す  
 る者、七十二人といはれり、是は、不器用のもの、寄合  
 あるべし、六藝ハ、則先禮のこを云へば、客を儲ける  
 席上、恭しく出て、老やをさし、肴をりりさばき、  
 主人に代りて、ねんごころよ、りてあり、客の心を悦  
 ばし、年三十よ及ても、いづれをも、いちより下は、蒼  
 りとも、長幼の禮を、重んずる是、樂則三の糸あり  
 て、下手あることを、耻ず、客をへちまとも、思ひ、すて  
 まを、ちぢぐひ、うなちがひの、うるまき、声を、高慢、  
 ほとり、上りると云へども、是を、聞客は、こや、魂を

うむしれ、面白しと思、鄭声を以て、雅樂を亂すの業を得、是れ射、弓、矢、其日の客を的と定め、其穴を射る、袖らひたぐふと、是れ御馬をつまふ、是れ又客を馬、其れその所をたけを、鞭を以て、車坐を居あり、ひたる客を、心のあり、また、是れ書、則客をかく、かくひ顔の硯石、ぎんだの匂ひ、き、墨をす、流して、毛のあり、筆を以て、ちく、算術あり、皆胸の

内の十露盤を以て、客の身の上を斗り、天元の一度、我身は西引て、祿を残り、客の一引て、若残の術あり、是れ如斯六藝は通するを以て、是を藝者、云ふ、是れ者、斗り、其故を、米安無大力、のつまでむじの御張紙、あま中のひ、物思ひた、と、錢と諸色の、合る、玉落、金、さす上、

米安無大力

さきより御誕生さきさきあがらるる色なき御  
うせぬ中にてかすとしてたますそく悪しき肥田  
でも死ねぬしく御乗船も中のみかた思ひ  
其元米安無大は  
あるもいふもその嘆やん身よあつてこそ思ひまゝ  
右院之御所 見保元物語  
或志づの女の姑の六ヶ敷にて出度思ひ  
昔封して守は致して遣はるる遂は後宜なり  
其角  
て封を切りて見るよ  
けむるものちよ信なき蚊やうらま

十三歳ある童或殿之御前言たる事を知  
此より顯宝舟をそへてよめとありし  
是るをきくそ宝舟たるかあり積おすとも  
或ちこの禁帝待りし太子戯は紙みて梅  
の花を御切遊しちこの頭は御載せ被遊  
時直ちこのよきると或人の語り  
其あよ書おきぬ  
すべしゆめようかす梅の花白髪あそつしまつらえ

貧神贄

ををえりて二日破して躬痛せをいひてその神やまらん

其鳥飛三番叟画贄

浮水

鈴ありの枇杷を及哺れ鳥よみ

下谷仲町山田七藏より刀屋にて大脇指長サ四尺程の者を見る其鐔のち通り彫付有リ語左ニ

記ス

龍蟠泥與虬同虎眠谷與鼠同龍得雲虎覺眠一  
刀得術其動靜恰可動天地鬼神也

文化十四年丁丑二月廿八日本石町四丁目大黒  
屋三郎右衛門より兵服問屋珍敷鼈甲翠簾を見  
候處天下奇品故左記し置之

幅四尺五寸丈八尺七寸數貳百拾本斑以全  
身の龍を摸出す共二枚

山子設出郊舎卜居外贈此寄贈子設故竜渠  
先生之男而

池守秋水

折肱功績此移居明月清風宿志舒扁鵲曾遺診脉

訣長桑為託禁方書削餘耳熱邀人傲夜色樓涼夕  
水如知是從今後園裡稍着杏樹成林初

百渡

紫檀碁盤 壹面

但碁盤之目一角ニテ入縁通り金銀象眼四方

唐子遊以唐貝唐石瑪瑙瑱磔タガヤサシノ

類ニテラキ上ケ草木伽孔雀石攔干珊瑚珠豆

カ士二人宛白檀

紫檀碁筭 二 紫檀箱入

但松ニ雲鶴ヲキ上ケ唐貝唐石孔雀石珊瑚珠

ノ類

一白石瑪瑙 數百五十四

一黒石蒲萄石 數百五十二

右價二百金

番匠隠語

クモ 烟草ノ<sub>1</sub> ○ナガサ主人ノ<sub>1</sub> ○ツツパル 怒<sub>1</sub>

シタバ 女房<sub>1</sub> ○ニカル 密通 ○コヤガトブ 打首

ホヅラツケル 飯<sub>1</sub> 喫 ○ケヅル 酒<sub>1</sub> 飲<sub>1</sub> ○蓋杉板<sub>1</sub> ケ

伊勢音頭 四季壽

あきみよりともあもひつるあすもつるおほろ  
よとある春の桜の月よりいふや岩盤なる松と  
いと根よむすこは秋よあつをかくりあちあま  
秋うつろふを孔よ春くんで夏来りて白た  
や糸の毛ころもあつをくして袖の香きよみを孔  
橋おその目よりいふ志のひ麻の夏よとおとろ  
ほくまに月おあつるのともあまのあまありるの  
りまきやまあつをくあつ秋のねよ子とせをす  
たし松虫のあまあひるるおみまへりしおち

あきこよみおきりあつの傍にのたりあれもむべ  
いせようつろひあつをくあつてあつあつあつあつ  
くれあつあつをあまのふ本のあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

古市 杉本屋彦十郎

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

石鼓歌を太田錦城詩より作りて

父母之心人有之路傍誰棄可憐兒夜半忽有啼声

止。應是夢母懷抱時。

鵬齋とかけて大根畑の燕と解

其心の菜裡よりくぬ

天民とかけて音吐の爺と解

其心の柴刈多

蜀山人とかけて辨才天と解

其心の目くらが信向する

五山とかけて年寄の藝者と解

其心の詩話斗て買人があふ

屋代太郎とかけて籠細工の見せ物と解

其心の腹がなる

大包十八願小包六字文

極樂 傳來 心體安樂丸

但小包一貼ヲ朝夕共常ニ用テ吉

一親かろく我子孫のため

一民を何ぞしむの君ハ日月の如ク

一民を貪ハめハ一の草をつむがごとク

一忠義ハ末代の志をつせの手本



一不忠不孝人面のりぎりの千本  
 一朝夕かみきんいその身まやうの御礼  
 一信心をまことのあるりれ  
 一まよひのたうらのつまらう所  
 一老あんのちえのゆきあう  
 一まけおれまを道をまきくいとまこひ  
 一まやうりんのまらうのまらうのど  
 一とひまらひの具家長久のまやうこ  
 一家まやうをたうまきまひのり  
 一ひとりの金持の三ツ子は花を持せーがぬー

一りんまらうのりんまよの下づろひ  
 一たう事をまれのうの神  
 一商人の賣先買先ハ父母のど  
 一無慈悲のまらんぼうの宝のまらん人  
 一手あひの通用の目のまらうど  
 一堪忍ハ其身の長久のり  
 一かんのあんのまらぬ心のまらうのたうの故  
 一かんのあんのまらぬのり  
 一らんくまらぬのり  
 一家内らんくまらぬのたねまき

一家内和順ハ福の神の御あつり  
 一 ちり多きハ毒こまつて毒を吞がこり  
 一 倅人ハ真綿ヲ針を包がこり  
 一 人をそそむむをおとろへの考いむ  
 一 かすりまうハつこまごのこまきり  
 一 人をあつりまをかのれハあま故  
 一 小食ハ長しきの考り  
 一 大食ハいれちあまうあま  
 一 大酒遊ぶハすくあ身あま  
 一 悪人ハかゝるのたをりもの

一 善人ハ五常のあみ  
 右此御薬の功效ハあまをかくあハ荒増  
 の分よりつれあうまも用てあま  
 古歌

極楽を西もあまはあまのまきりあまがせあまあま  
 後生マをまきりあまはあまのまきりあまがせあまあま

家内和合所

此方より無理非道一切賣出し不申候

其身野徳成



仁過ハよク成  
義過ハかク成  
禮過ハつラ成  
智過ハぬク成  
信過ハ損ス

井上侯國替之時

水ヲ出テ河内ノ下ニ有ルルヲもシてシヨク又タまシテシリ

文政三年庚辰六月六日雷落ハ所町奉行所届書  
出シ字

一阿州様表門前  
一音羽町

- 一鳥越明神前通 一向柳原酒井様御屋敷
- 一本郷三筋町後袋町一堀田原
- 一駒込富士前医師之家 二人死
- 一傳通院 一池之端日野屋
- 一傳奏屋敷煉堀十六間崩
- 一兵服橋外後藤竹屋之間
- 一本所緑町中川忠五郎様御屋敷
- 一本所猪之堀
- 一本所吉田町小笠原彈正様御屋敷
- 一新吉原弥八玉屋女郎三人死

- 一神田小柳町
- 一駒込町家婆々一人死
- 一奥平様御屋敷
- 一金杉毘砂門
- 都合十九ヶ所

鯁鯁魚称筋者鼻祖堀江町山崎屋利兵衛者云〇  
 鯁鯁店香物ヲ出夏二十五年前絶テ無夏ト云右二  
 件於深川屋阿部春菴老ヨリ承 文政三年月日

文政四辛巳二月十六日比ヨリ  
 蒙御免諸国凡十日宛角力初日不取組付

流行風	皆ケ寐	寒サ山	頭痛山
鉢巻	重子着	ヨシゲ寐	小僧モ寐
白粥	二八盛	寡山	門立
藪ノ匠	日出山	湯屋難義	床家難義
藥ケ森	高うあり	早直リ	臨ケ関
大熟	足ケ樽	長髪	花ケ成
引返	又寐山	明日ハ大セ	合

流行風六歌仙

寄京風

都より八重丸をの隔あり鼻あちよの妻の山風

寄大坂風

浪波がよのり人あつてあはれき吹くせの大坂の美

寄江戸風

くつき免のくそをくくあつたはよあまうある頭痛神巻

寄田舎風

とやう風あつたるを引回のこまうりいと持う人があ

寄藪医風

半治療せうが葛根とあう味あてしあかぬ喰て汗これ

寄薬種屋風

年と母よをあれといのめらんえせのたえよと福の種うせ

流行車風と云

やみくもよ引〇おひひのも有〇あひひの  
も有〇おひひ返る有〇うあるのも有

さうなよええ

うしを煮あ鯛とせざるは各も言

吉原

平目よりびびてをりれとあつをるな

深川

葉生をあぢもなはおひよかぬくま

品川

切ら美の人の集るがうまあう

根津

すつちんの遊戯をばておきれり

吉町

喰るそおろひも出るくらけり汁  
 鮎いりもろろ魚めやしてさ  
 いちまの余ぞいみと急るあがら  
 つまも食跡あまふきいもい  
 白魚の子おとあるとわけてる  
 涼しやゆれはるるゆるり鯉  
 これも又あつてちあぬかつを節  
 みほひよもたれこころうあがし  
 後家  
 比丘尼  
 辻君  
 下女  
 園者  
 藝者  
 女房  
 御守殿

葉捐 積金ヲキエンニ被仰付之キエン

筋違外

神田仲町續牛込袋町代地  
 家主金次郎店  
 友次郎妹  
 梅 當巳十四歳  
 右梅義去辰八月中下谷三味線堀小島町雪踏屋  
 三松屋治助と尸者方奉公同様貸遣い外同十月  
 中治助義新右衛門町致轉宅薬種渡世罷成梅義  
 一同忝りい外同人義兎角気分悪敷相煩い間十  
 二月中友次郎方引取養生致い一々及全快い付

太平廣記三十八徐嗣  
 伯治老姥之針道事  
 載す可佐考  
 又尾腹巻中難可佐考

當月朔日神田於玉ヶ池小普請方大工肝煎相勤し  
川村久兵衛方奉公差遣し又々病氣存同九日  
請人友治郎方引取歸し如同日右梅義乳之下  
縫針一本出申し同咽か度々折針六本吐出し  
し翌日襟あり一本先陰門あり小便交り同三  
本同夜膝あり二本同廿三日胸先ヨリ一本都合  
折針錆針共是迄十四本身内あり出し中ハ血  
も出不し痛し不致出しも有之し又者針先見し  
間毛抜去採取し共錆し針ハ強痛し有之し  
右付ハ何そ怪敷義ハ無之哉と相尋し處前書新

右衛門町治助方罷在し砌去十二月中梅義二階  
臥し居し如夜分鼯之様成りの叅り臥し居し上  
を飛歩行し多し之邊犬造小便を仕掛右小便二  
階下迄し染出し程之儀度々有之由右ハ全小狐  
可有之哉併梅狐付し様子杯ハ更無之し得  
共右躰之始末全く狐狸之仕業有之し哉尤未  
同人胸之當り肉内四本程し針有之皮透し見し  
し得共手を付しハ甚痛苦痛致し間其修差置  
し由勿論當時気分ハ常躰煩し不致罷在し

文政四年己五月廿八日

螂蛆甘帶

見出莊子能蛆以氣禁之俟其腦也陸佃云蜈蚣食蜈蚣即食蛇蟾乃入其腹食之

誰言秋色不如春及到重陽景自新隨分笙歌行樂

處菊花更子更宜人

鄭嘉訓作

右詩伊東氏唐紙一枚認カモ加藤佐久介土産

右歌子藻すむ虫のか恐るこる

進氏若州お濱之産之田る叅ハを自分親

見しの苗蝦の類ハ漢名何とハ哉未考ハ

漢宮覽古

唐徹累天

檻々王宮連子規和九天沙場難菜夷塞防陣関山

逸賓退位耶安郎面湖河拓拓轉深澗散葩有破字

同

唐徹累天

檻々王宮連子規和九天沙場難菜夷塞防陣関山

逸賓退位耶安郎面湖河拓拓轉深澗散葩有破字

御高祖頭巾一名袖頭巾

見教訓衆方規矩室曆時代男女共カブリ流

行ノ物トゾ



文政五年四月十八日

公方様御名代昇殿

公方様

禁裏江

一真御太刀

備前国代金十五枚

一黄金千枚

一御馬皆具三足

仙洞江

一真御太刀

備前国代金十五枚

一黄金五百枚

一御馬皆具三足

大宮江

一黄金三百枚

一卷絹百卷

一縮緬紅白五十反

准后江

一黄金二百枚

一卷絹紅白五十反

関白江

一作太刀一腰

一白銀千枚

禁裏江

一白銀千枚

仙洞江

一白銀六百枚

傳奏

一作太刀一腰

廣橋一位

一金壹枚宛

山科前大納言

御臺様御叙位御昇進

御臺様

禁裏

一黄金五百枚

一縮緬紅白二百反

一大紋綸子千百枚

仙洞

一黄金百枚

一縮緬紅白三十反

一大紋綸子七十卷

准后承書無之是金誤脱相見

傳奏

一金三枚宛

廣橋一位一大紋綸子三卷

山科前大納言

右御使

一松平讚岐守

差添

一甲條河内守

内府様御名代昇殿

内府様

禁裏

一真御太刀相摸 国代金十五枚

一黄金五百枚

一御馬皆具三疋

仙洞江 一真御太刀 相摸 国代金十五枚

一黃金三百枚

一御馬皆具三足 目力金十五枚

大宮江 一黃金二百枚

一御馬皆具三足 目力金十五枚

一縮緬紅白二十反

准后江 一黃金百枚

一縮緬紅白二十反

一縮緬紅白二十反

関白江 一作太刀一腰

一白銀五百枚

禁裏女中 一白銀千枚

仲洞女中 一白銀五百枚

傳奏 一作太刀一腰

廣橋一位 一金壹枚宛

山科前大納言

御簾中様御叙位 付命 二十枚

御簾中様 付命 二十枚

禁裏江 一黃金三百枚

一縮緬紅白百反

一大紋綸子八十卷

仙洞 一黃金二百枚

一縮緬紅白五十反

一大紋綸子七十卷

大宮 一黃金百枚

一縮緬紅白三十反

一大紋綸子五十卷

准后 一黃金五十枚

一縮緬紅白二十反

一大紋綸子三十卷

傳奏 一金三枚宛

廣橋一位 一大紋綸子三卷

山科前大納言

右御便 酒井左衛門尉

差添 戶田備後守

別段御續被為在候

此度為御祝義

御簾中様

一白銀五百枚

一縮緬紅白二百反

一大紋綸子二百卷

一御簾笥一對

一御小時計

右之通

御進献并被下

高

一黄金四千八百六十六枚

一銀五千六百五十枚 一縮緬九百三十反

一大紋綸子五百四十六卷

一卷絹二百三十卷

當時貧病流行付自 公儀御施藥之て被下候

藥方

五社散 一名御袖乞藥

當季ヲ引取ケ武士用困窮各酒酒黄金生才テ覺各

右歳末武家方町家之絞汁ニテ用

右ハ日光御社恭被仰出候節何者々作由

永富町大久保 手代元岡長十郎方病用テ恭

候處土藏入口張付有之書付左之通門

富久者有知遠仁者疏德

大坂無宿

中村歌右衛門

一此者儀不男之身分より當春中小性吉三郎尚  
又藤屋伊左衛門等之色男役相勤不届に至  
依之江戸中ロイキナ上堺町ニシイテ獄門の  
庄兵衛行者也

文化六年己丑十月

春臺先生碑在谷中天願寺ト云

芭蕉西行賛

風俗文選

捨てて身あましのとろしをみちち日いかれこそすれ  
るあめり日をすむこそすれ

楠正成

神武建功録

さしめしむるまのこころをみちち日いかれこそすれ

北山の歌

一日暮こ云昏よ出云

さしめしむるまのこころをみちち日いかれこそすれ

蜀山人

あてはごらんせむしいらはもともあしこそ人のこころあはる

京傳

福を信じていふがよすがらおきてまゝおきとみのをさるるあつら

三日續遠馬

松前様内 久保田松五郎

文政九戌年十一月十三日朝五半時出宅地獄破  
之尸馬ふる川越城下遠馬暮六時帰翌十四日朝六  
時同所遠馬日入比飯直よ千住先竹之塚追参暮  
六時帰川越者兩日續翌十五日も下総芝崎村追  
往來十四里朝六半時出宅吉野負八宅々又諏訪  
明神二里半之処参詣暮六時帰三日續之道法都  
合六十七里半余

雪

ちうとつりの雪や心をあすゆるとておたすすせよ  
雪あつてのちぢききいづをれと実のちぢ為は純ぞうれし  
雪あつておちを志れぬちうゆる消たる後はあほの之ありし  
雪あつたゆたのぬき人のむねをさをそえよ人ぢきはる  
あつのまゝえは席雪の肌つるちぢ消る勢をる  
雪後寒威痛徹骨可憐衰老卧病人寒梅水仙凌寒  
開知是松栢又論外

ゆる僧ぢあるより  
黄檗宗淡海覺芝和尚歌野人傳卷之三載不

女ぢ目出る者も又しち  
秋かやだるまかひのゆらむ

高田又兵衛鎗術を三代目將軍上覽し罷出相手  
し觀興寺七兵衛罷出

無眼流元祖三浦源右衛門宮本武藏時代

大崎玄蕃福島正則家来後紀州武効之者故御召  
抱し相成其節武邊達者之故し太刀筋一覽を所  
望之處大崎戶ハ一向し劔術を御覽し入し様  
成夏存不しハ去たれもまけハ仕間敷より  
上る

梶原之妻花見之歸りし家来し櫻之大板を折  
為持頼朝之物見下を通しを見て頼朝公被り  
ルるも又未ん春ハ何を頼まん梶原之妻直し  
返し出るしき能入をもあしぬせの中し頼朝  
公御かん何し人を出して何者之妻あるやと  
問をせらる梶原之妻のよし上る其後梶原  
故有て此妻を去らんとせしは頼朝公右之返  
し一の才を以御留被遊しより

大和之人之妻を去る時折節兩りれば主人も  
氣之毒し思ひ傘をさして忝れし其妻



カはるハ... 本朝語園

吉原言葉見立

サゾオモ...

ハズル...

京を...

連流...

ぬ...

お...

恐此間有落字

傳奏衆 御馳走人 周防 勅使 鷹司殿 竜口賄賂

志んよ...

御能拜見

エ...

右金銀吹替

...

一橋

急な...

御寶塔

お...

藏宿消印

志ん...

上

...

神田橋

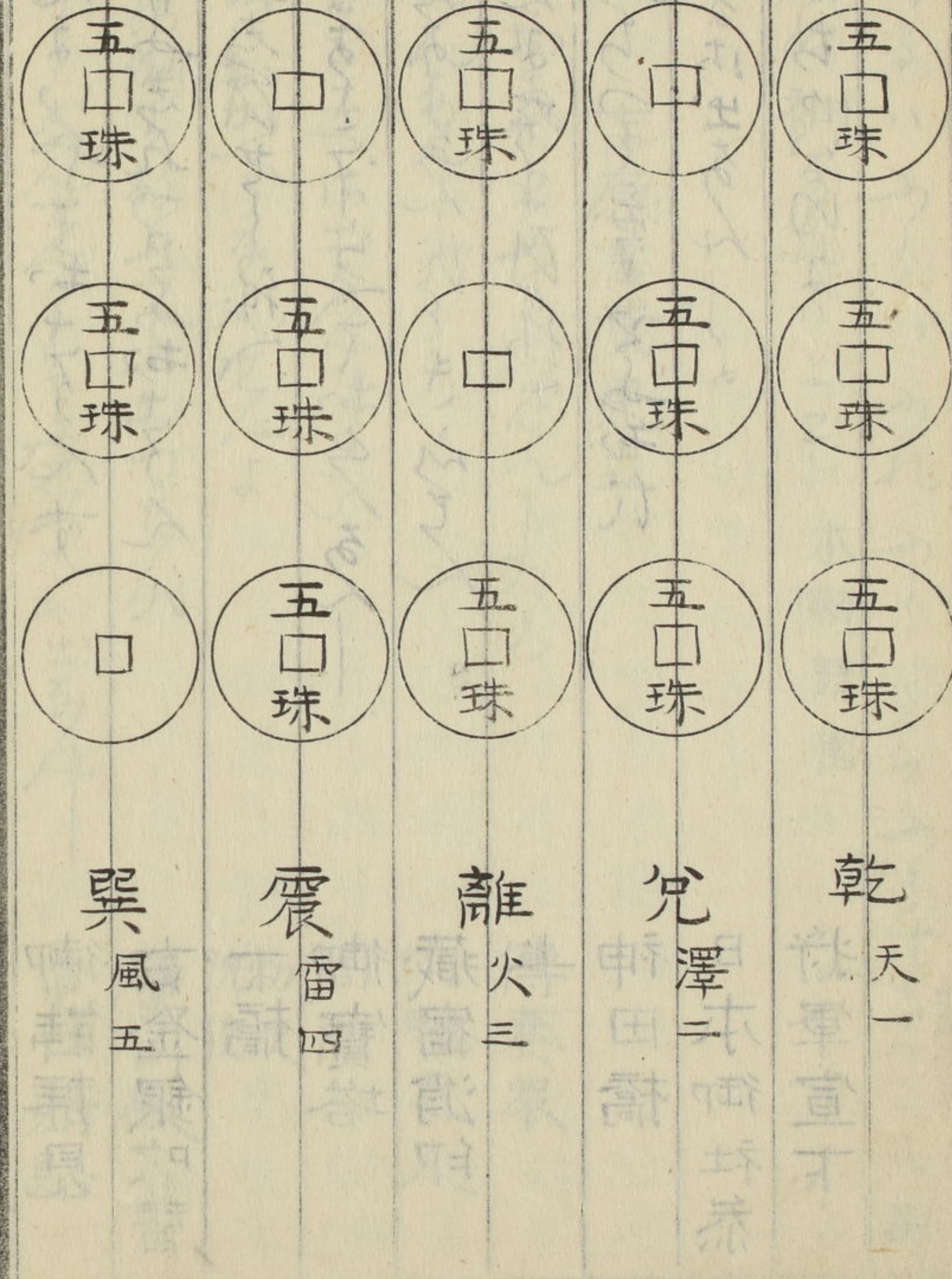
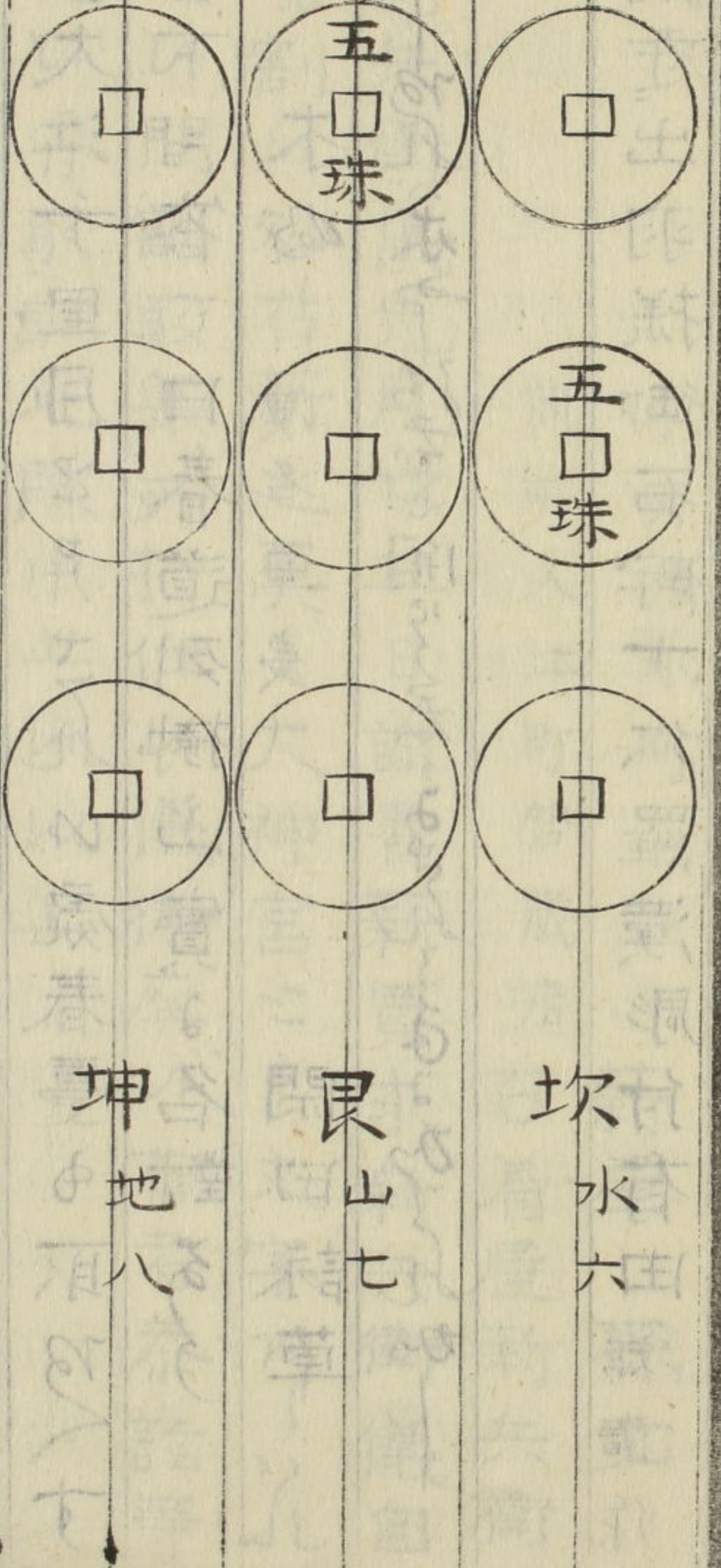
...

日本御社叅

又...

將軍宣下

右三以銅錢而得卦之圖  
 右者擲投三銅錢則錢之為表陽爻為裏陰爻折  
 三而得卦  
 浴日擲錢之白



下震四合六以五而除之零用之而河卦初九六  
三與引較而上澤二為動爻

祖来先生戲二春臺先生二百人一首之内を以て  
曰大江千里月之尸二さ二れ二の二處春臺も取二り二す  
言下二答て曰春道列樹山實二名對二あり

木ぬ一漢名辛夷

閑田詠草

時一の一ゆ一れ一木一や一花一を一聞一く一る一を一ま一ん一た一ま一か一ん一か一

天德寺出羽様御石碑十六羅漢彫付有田矩隨作

本所清水町

薪屋孫七

同所入江町啓藏店

古着屋新兵衛

右新兵衛儀先月廿三日  
前書薪買求新兵衛儀自  
分二割二れ二丸二右薪之真二大神宮二之二尸二文字二何二れ二れ二  
有二之二間割取集所持仕二儀御座二右者二恭詣等  
有二之二存取調此段申上二以上二

文政十年亥十一月四日

本所入江町名主 七兵衛

右薪之儀者御奉行様御殿中御持叅被遊二由  
御座二

饅頭元之字者饅和訓小手也鎧着腕有之今饅依食故饅从食

林氏和靖十四葉孫林某未日東無業始於南都造饅頭為業形似饅曰奈良饅頭當時塩瀬山城大掾此子孫也自唐八重塩路渡來故塩瀬為家名曰奈良饅頭形○長當時○丸音摺赤小豆今砂糖入曰了ト

西山遺事云西山公御死去の年御病中馬場世五右衛門其外御前相詰いもの共被仰いむか一世汁請こり事有其様子客を請ひて

其客こも銘々飯をめんつゝ入携へ来りて主唯汁一色の拵能時分汁を鍋の裏座敷へ持出打より賞味りてとや此外何の饗こり夏も冬も共興入漸いゆるさ此諸士及ひ百姓町人あて堅く相守るべき旨度々油断あり申渡さるるも治世故もやあ者客を請けい節分限すすまてをるる美麗を尽しゆる相聞ゆる夫存大森典膳汁搦を再興いたし其方共段々興行仕ゆる自然に城下并領内ももひろり美麗成義相止可ると思召

被仰出レ仍々汁搆を<sup>し</sup>可凡の所<sup>に</sup>御病氣  
重らせ給ひ間もあ<sup>く</sup>御逝去被成<sup>り</sup>

駿臺雜詔聖人之誠條<sup>云々</sup>君子ハ常ニ内ニ心ヲ用  
ビツト夕バ手前ヲ心シクシテ外ヲ飾ル下ナシ  
タトヘバ錦ヲ衣テウハラヒラスルガ如シ其美  
ヲホヘ共オホフヘカラスイヤマシニルキゾ  
カシ小人ハ内行オサマラスシテ外見ヲノミカ  
サレハクサキモノニ蓋スルガゴトシ其臭フサ  
ケ共フサクヘカラズイト、アラハル、ソカシ

枚乗カ呉王ヲ諫ル書ニ欲人勿聞莫若勿言欲人  
勿知莫若勿為此語淺ニ似テ味フカシ名言ト云  
ヘレ口ニ云テ人ノキカヌヤウニ身ニナシテ  
人ノシラスヤウニトスルハ賤キタトヘナガラ  
悪ニ利息ヲ添テ身ニラフガ如シ日ニソロ月ニ  
ソロテ其ヲヒマサリナハイカテオホヒカクス  
ヘキ聖人ヨリ以下ハ君子モ過ナキニアラ子  
氏是ヲカクサントハセスシテ人ノ見ルマ、ニ  
アラタムル程ニ過ハ過ナト見ヘ改ルハ改ルト  
見エテ其シカタニカクル、コナク心ニ一息ク

モリナキトシルレハ反テ其徳ヲ光モマサリヌ  
ヘシサレバ子貢モ君子ノ過ハ日月ノ食フ如シ  
過テルモ人皆見更ムルモ人皆仰ト云ルソカシ  
云

鶴の含穂餅米の記

文政五年の年豊後守京都町奉行在勤之折御  
所司代御亭におひき鶴之含穂ありて扱三粒  
を得られしを持帰られ其内一粒を試み植付よ  
ごて給りしを翌春に至り時節を量り小茶こ  
んよ水を入是をひきし昼向日向は運ひ朝暮ハ

火炉のきこよめ、免丹誠の甲斐ありて日數  
立ぬれハ芽を生きたるを鉢に移し尚も心を用  
ひし青葉一二寸とをあらうたりし一本の  
夏ゆへ成長覺束あり依々近き田方より稲草少  
々取よせ是をもひきつゝ植へて其成長を窺ひ  
し新芽三本あり植添し稲草よりハ長く延び  
初秋の比ハ穂全くと出實入もよき恙あり納  
神棚に備へ置し其年の冬豊後守召させられ  
恭府の節持下りしを知行武州越谷領七左衛門  
村の長善右衛門より付仕付させ且又水旱の患

も斗難くれば迎其内を煮て豊後守方へ出入い  
たす小松川村の長達右衛門へ分与へて所は植  
付しよりつれも年々歳々實を結ひ五年を経  
て亥年に至りては十一俵の米こもあつぬ此米  
来歴のいと珍しくめで度い云い更あり諺より  
粒万倍こいへる夏實は偽あらず前の如く丹誠  
を積めぬハ一粒の米五年あつて數俵こもる穀  
の尊き夏あつ人力の誠ある夏思ひもかゝぬ依  
之此米の来由と丹誠を尽せ一端を書志し  
て懇命の方々へ聊しおろし奉者あり

曾我豊後守内

石毛幸太夫貞道

或人孝行之狂歌

瘡かす穿もりすきをほれハ郭巨まきし孝と孟宗

眠家教訓衆方規矩抄 宣揚堂藪内竹齋編 室曆午年春

中風門 此門ハ医書ニ説く所の真中類中の

治療ハハゆに中より下の人ハの風俗身持

の諫を療治ハあぞらく先哲の方書ハ依て

教訓のヒ加減を我ハ等ハき野巫医ハ示ス

六諭衍義大意湯

大和俗訓丹

家道訓丹

民家分量丸

眞加訓丹

此外名方おほくはくも爰は漏れつ大体此薬めて治すべし面々家業のいとまある日におこらぬ用べし人々職後休息の時用おれは甚効有職前を忌行餘カゆればの聖人の教のこゝと家業をさし置て用おれば泥<sup>ちか</sup>まて毒あり秋冬夜あるの節は別して燈火を用おべし

禁物

小歌

浄瑠璃

酒

哥流多

小兒宝引

右薬方の外は石川氏の渡世袋にて三冊あり甚人よ益あり尤つ補は用べし百姓袋町人袋何れも良方あり病は考へて用て可あり此三冊は医家の錦囊小青囊も比すべしかゝるは讀べ

農家貫行

百姓の身持を委

渡世袋

町人袋

世帯鏡

商人夜話草

以上四冊町人の直道

差出口

青柳の單掛著伊藤氏

酒説養生論

酒の毒ある夏説



教訓世帯鏡

下手談義

静觀房著

諸州奇夏談

静觀房著以上三卷酒ノ

家内用心集

用心備急圓

此藥方ハ人毎ニ去れども製法を

誤藥性の善悪も吟味せず甚しき自墮落家ノ

ハ貯すして急ある時ニ及んで狼狽故魚ノ調合

してなあるをかくしこ知たる藥方あるから

油断のつよき病人ノ何れも

蠟燭 性ノヨロシキヲ撰テ用ベシ

灯笼 ハ新ノ隨一ナリ右キヲ忌時々張替テ用ベシ

水籠

ツカフ時ニイタリ天水溜ニヒタシ用ユ

細引

染タルハアシ、色ノ赤モ不用白キラ用

草鞋

田舎者ノ持来ルハ生ワラニテアシ、

縄

用ルヒテヨキ程ニ切ツテ卷オクベシ長クツキ

擔棒

一名ヲウコ天秤棒

釣瓶

用時ハシゴト一所ニアルベシ

梯子

時々改見テ用ユル節ケガノナキヤウスベシ

鳶口

解来ラテ走ル時ハ柄ヲ上ニシテ行ベシ人ニ疵

右之藥各製法ヲ鹿末ニセズ手近クニ所ヲ定メ

オキテ急病ヲ救ベシ

又方

急變隨身丸 一名枕下丸

羽シラリナリエリニシユス 笠陣笠ノ形ニテ黒クヌリタル

胸胸カケナリウラニ紙入ラ 股モハ引ナリコハゼカケタルガ

筆ヤタテヲ用ヘシ

右之藥常ニ置所を極夜ハ枕下ニ置ベシ夏ト云  
共油断スベカラス盜賊ノ用心トテ枕下ニ股差  
ヲ置人有必無用ニスベシ町人ノ大腸差ハ甚ア  
レキ病ナリ用ユル夏ナカレ此外用心ノ仕ヤウ  
ハ伊藤氏々寐らんぬあゝとソリヨリのは委一らん

ハ畧す

水カケ論ト云書アリ 喧嘩ノ事ヲ論たる畧あり

後編下子談義 静観房著 辻談義 嫌阿著

女子訓 大和小学

女大学 つね子石がみ

教訓女朝鑑 女訓身持鏡

女教訓宿直袋 女教訓智恵鏡

女教補談袋 當世誰が身の上

女友鏡小冊ニシテ其詞俗ニ通シ安ケレバ女ノ耳ニ入安シ尤

婦人壽草 産家俗訓



用人

利口者トイハル、人ヲハ用心スベシ召仕ハ無用ナリナトニフキカタテモ律義ナルガヨシ人ヲ用ユルニハツレノノ場アルベシスルホドノ人モナケレド利口者ハ油クナラズセハナレドヲロカナルガヨシ

亭寧三兩

兼畧ノアラ皮ヲケヅリテ用ユ百エノ細エヲ始メ賣物ノ仕入十種ノ役俗ニ云ヤリバナシ又ハゾシザイト疎畧ノ心ヲ太リテ如法ニスルコナリ今時ニ如法ト云フナマニヤケタヤクタイナシラ云ツレハアテ字ヨミカ女方ト覺テガイタルナリノ事ソレノイタリタル右法ノ如クスルヲ如法ト云ベシ律義ト云モ律令ノ通リ守ル人ヲ云馬鹿律義トハ尾生ガ類ヲ云カモソレモ人ヲタラス智者ヨリマサルベシ

又方 是ハ志和年房フクツント云紅毛人ガ秘密

ノ方トゾ齊家修身丸トモ号ス

衣類

ナルタケハホ綿テシマヘ是非ナクハツムキカ絹ヲツツト着ルベシト紀ノ貫ノ歌ノ如クハレ着ニヤムコヲ得ズハ細カキスヲ隨分大事ニ着シ事ヲハラバヨク畳テ土藏穴藏ヘ入ラクベシナツトモ手アラスバカラス裾縫モタヤスカラスモノゾ

脇差

金銀ノコシラヘ花麗ヲ忌錆タルハシルシカラストテモ町人百姓ノイラヌモノ也此ヲ得ズハ用ベシ大方ハ扇ヲ代茶ニ用ヒテ可ナリ用心トテ枕下ニラクハ馬鹿

算盤

夢々マタギ越ベカラス町人百姓第一ノ宝ナリ帳面モシダラクニシテ後刻ニ時ニ付ベシナド云内ニ余症ヲヨリ健忘ノ症ヲカチテ節季ノ算用アズ内損トナリテハツルモソロバンノ罰ガアタリタルナリ心月モカ、ミヲ備ヘテ敬フベキ器也塵ヲ拂テアガムベシ踏ベキ物ヲマタグサヘ病ナリ療治スヘシ况一切ノ器ヲマタグハ狗子無仏性喝

此藥朝夕用テ怠ラザレバ潰レカ、リシ身トラ

興起シ借金ヲセズ物前ニ胸フサカラズ有ナケ

レド食ラス、メ身体堅固ニシテ壽命長久也試

ニ黒キ鷄ヲカヘバ弥黒く白キハ白し常住不變

繁昌ノ家ト成ベシウタガフコナカレ



早繩

早繩



鉤繩

早繩  
鉤繩  
早繩  
鉤繩  
早繩  
鉤繩  
早繩  
鉤繩  
早繩  
鉤繩

十字字綱



四  
五

假繩



上繩



右者友人晋氏所託也 傍りて

本阿弥光悦信濃おむすて山之村長まこあろし  
時主人の御前事者刀劔目利之より得ば珍  
敷刀余が家御座候間御目かけのと刀を出し  
為見ゆ捧鞘めて銘も五郎入道正宗と有之ゆ  
主人甚自負之体めて極付其の様ゆ甚困りゆ  
付鞘書致遣裏に狂歌一首書付其夜之内逃去ゆ  
こり夏に其狂歌左記ス

信濃あるおむすて山にありけを銘ありてし身たのめを

人間無如醉。醉中世味軽。要問醉郷道。一杯是一程。

柳多留世六編抄

掃溜は怖おひたるこあり

風袋を知りぬりぬはだいな

ゆみくちやまき各傍えあり

腕をあげると花姑役あり

袖の向人をして度あり

兄だけたまき安い室姑梅

出かとりま土まごまつ考れ

言れを眼でえりそはて耳でえり

志をひかり酒姑使よ下戸をやり

あまつてう食物らく巻られる

偉大鼓は坊おそろぬおしやうさ

山号寺号金銭の富まるあり

舟を折みけて禿いこひて居る

大馬姑は股えりの和尚作ク

年何け姑金令系をえり跡

菱餅に精男女姑をわいぢ

物心あるて二ま目の母をもち

さや丁をぬけると江戸の目貫こ

瓜姑灯を花の光焼ぬりあり



舞さかろひ新字の新がえをのそ  
魚のたらしめをよきよか信はし  
それ構夕刻の芋がうつせよい  
市利運ちをいつ系正が味方  
大坂新闖切こけて江戸へなり  
月雪の花を息子のまきちし  
伊達よ眼のうついふぬぬ老  
常の片を梅の笑ひひ  
下つよをさる附よする是の豆  
まじりよあつてをたたく白嵐

風茶女のう風をひめて居る  
産後を女房新まきつる物を  
灸をすくさせて土器隠居こり  
清献上たより汗をかいてま  
くい物(礼系をのめす背かむり  
脊をこける雨の大つ不流まうり  
八月目よ流て女房くらむる  
持系奴足達珍物系屋です  
笠の傘やうで男の口よりせ  
股ぶとを一口くつて頬ををき

旅おる守天井くまらふあり  
親も子も土用之辨いぢるでけりキ  
大馬の俵も之へるにころり免  
ぬれし嵐は大馬をきかか  
かれまふとまてせもいけて居る  
らゆゆの猫こる種きかぢり  
草刈も洗濯のをうまのさ  
生身魂尻をひるるこ下女もひ  
みんる移で居るは鶴鴒る床やち  
鎗の石突でいうけい湯をこらし

仏力で折くはぬハ柔らくし  
焼つぎやくのそさうでせをばら  
安侍使者二八の朝は鏡をたて  
位牌近と免は付てる百をんを  
亭主火の車て女房をかぢりく  
人穴へ甲冑させて入れてる  
古井戸利えすんでよるあるふ  
牛ぬく冬い嵐の子をこらみ  
質の重の云葉多きいふたふす  
九代めいてんかかすまそをひ

香の物も喜人あつて東海も  
六人あつちをほひる一八りあ  
まッものを掃子す斗りあはま公  
天色を二とあ歌で馬すり  
勘当を由るまれいぬす施主三三  
どのさぬも下女もあつてあ居まり  
常盤の子のたを盤津の親の為  
目せなまの米を三ツは割し人  
かびびふをこけつうふ縁老こ  
おもあろいせいぬは三ツは性

お女郎よせああつて田を梅より  
はみりえりやううう死みつ  
士農工商とてああし合があ  
瓶をこる音で日本へ名うひま  
和川は月よみいのおあるあ  
晦日あも月がせんすことあられ  
土子へあ居あめうんたああ  
まおあつてああ子りあし  
初子の二字はあああああ  
大馬は仏のああをあああ

稻妻をりくよ孝女寺まへり  
新織のゆまぬを運出糸をり  
僧正かゝる奏をすは志し秘人  
早いものをこそ我がのついでに  
家ゆきる茶柱をてこそ買て来  
三まひでけ極出のかりろき  
知らん年久志ひる子の後任  
夫々い息を五雨のやると  
け若らちやを捨ず四手猪牙  
か神とた鼓で息子いまよつて

又煤をとりか隣やまき云  
なまきいひ鍋も集る百年忌  
うちあは花は嵐のさう摺根  
法入滅時候よもれし虫のあ  
糸のこそさきん上へも席より  
お志ひる八十七で隠居死よ  
くらかきさ伝女ハ赤一乳い思  
親の思慮がぬけてかこ志え  
仏師をい崗テを牝よつたるこ  
一斤い百万遍お施まよつて

たよちとな記よつて免がぶがよ  
家督公る仙もせれば鬼もせ  
乳光も鬼う下戸あゝどしたろ  
小粒でも色くしてくれお大か  
二日酔かよとを忘たるをりち  
生て居て年忌かそへる中風病  
小方極楽と息子惚及する  
追言をしまぬお結ごおもつてる  
ちいとむかぬがみつていぬこま  
衣川鑑りちろんこけおぞ

俗納亦よりきけハ男あり  
接角をいせを六文りしてやう  
ちんぼくを志しおして後かう  
み入れハゆで尻をひるよとをん  
何のもお吐きあるとよ秘んや  
縁と時言をまつてると下女ぬし  
志ん草を松茸がお志ちち  
紅毛パン方小倉古せんを町福田屋市郎兵衛傳  
大麦粉 酒少 水よて煉せろろみそむ用也

小倉方言

あとの大 ○おそめる小 ○おぎん 女の ○あて身

密通ノ ○あけ気 盗賊ノ ○た、女ノ看をノ ○

木うろよ 薪を賣者ホうろよ ○おつちよあけすて、  
おけい

腹がせし 腹痛ノ ○たごる 咳嗽ノ ○あくだ

い汁にん ○あひそよ 灸ノ ○胸がくらみ 胸のそ

やせあゐ ぬすみ ○志ろこまひ ○ぬくみ

いひ、う ○光やあよ 銭をたひあひ ○あけ貝むき

ひこずし 湯をよぬみそ

福田屋市郎兵衛所藏之いすのホ刀は彫付有之  
候歌丸記ス

むしあ、実もあき老のよ服をぬらふ持とんやいせん

作濁酒方

白糶 粳米飯 各等分

右二味合セ 瓶中ニ入水ヲヒタノ位ニ入温覆

スルヲ四五日又前之通り合三之一ヲ加へ

又四五日ニメ四分之一ヲ入又二三日ニメ四

分之一ヲ加へ水ヲ増シ凡十五六日ニシテ出

来ルナリ

神息之劔

小倉ヨリ十八里宇佐八幡宮之社人之鍛冶也  
尸傳之其後正宗恭詣之節神息之鍛冶之場所  
道具七具俵有之正宗感心致又其場所にて平  
打之短刀を鍛冶佐奉納致し由今以正宗之短  
刀水油は漬有由小倉矢島四郎右衛門物語  
也

匠者意也。意成於学。方無古今。要歸治矣。

金之目方

- 一金壹兩小判 三又五分程
- 一貳分金 壹又六分程
- 一壹分金 七分五厘
- 一新南鐮壹斤 貳又程
- 一壹朱金ニ 七分
- 一壹朱銀四ツ 貳又七分
- 一右南鐮壹斤 貳又七分

一壹升之米 六萬千七百九七粒

一壹合之米 六千百七十三粒

一壹夕之米 六百十七粒

一壹撮之米 六十貳粒

若殿様為御名代小倉表御初入付為御祝義民間  
ヨリ夫保四己二月御差上左之通り

田川郡

一金十八兩 大庄屋六人 一同三兩 子供役六人

一米八十七石六斗 一金拾六兩

一青銅五十貫文

右糯手永

一米五十四石四斗 一金四十一兩

一御刀壹腰 一御長刀一振 素光重作

一御馬一足

右添田手永

一米六十九石二斗 一金拾兩

一銀二十五匁八分

右金田手永

一米四十四石四斗



一金拾貳兩壹分  
一青銅五貫六百四十文

一扎七百七十二文

一右伊田手永

一米八十九石六斗  
一金貳拾兩壹朱

一扎壹貫八百三十四文

一右猪膝手永

一米四十六石四斗

一米右野手永

京都郡

一銀十二枚  
大庄屋四人  
一同三枚  
子供役四人

一青銅八百目  
一米四十六石八斗

一右久保手永

一米八十四石

一右新津手永

一銀十四兩

一右同匠師

一米七十一石三斗

一右黒田手永

一米七拾四石四斗  
一銀十五枚

一竹カコ一ツ

右延永手永

一御扇子一宮

一飴二壺

一黃金一枚

右飴屋彦右衛門

筑城郡

一金八兩 大庄屋四人

一同二兩 子供役四人

一米十二石八斗

一金十三兩二步二朱

一扎十貫四百六十目

右安武手永

一米八斗

一金拾壹兩壹步壹朱

一批十貫八百二十三匁

一米右八田手永

一金十四兩二朱

一金四十三兩三朱

一銀四十三匁

一青銅壹貫匁

一扎五貫三百七十五匁

一米右推田手永

一金三兩二兩

一米八石四斗

一金三十二兩

一錢六貫八百二十匁

一扎十貫二百五十目

右角田手永

仲津郡

一金六兩 大庄屋四人

一金三兩 子供役五人

一米十八石四斗 一金八兩三分  
一扎十五貫目

右元永手永

一米六十石八斗 一金三十貫二百五十目

一米七十石四斗 一金二兩

一扎三貫百十一又三分 一金二兩

一金右玉作手永

一米四十四石八斗 一金二兩一分二朱

一扎六貫七百目

右節丸手永

一米五十四石九斗七升 一金壹步壹朱

一扎四百壹分

右平島手永

右差上之内萬屋助右衛門ノ上ノ薙刀御返

成ノ節御書附左ノ通

此度宇島萬屋助右衛門ノ差出ノ薙刀者所謂

了珎敷仕立ニ殊ニ作云ノ様之品差上ノ志之程

深 御感悦被遊以然處此品者決一不近仕立

無之右代之製ニテケ様之重器差出ノ志殊更

御満悦被遊レ萬屋先祖ヲ持傳レ品ニハ格別家  
 之重器ニ間此度改ム萬屋へ御下ケ被下レ間永ク秘  
 藏致登レ若又近世外ノ手ヲ入レ品ニハ其持主ハ  
 由緒旧家ニ可有之所手放レ義定ノ残念可存ト  
 被思召レ間其本主へ返レ譲リ可クレ尤レハ先  
 方ニても本望たりレ將萬屋ガ義心をカ  
 可クレ左レ得モ御手許御受納被遊レありモ御満  
 悦被遊レ間御下ケ被下レ付其持主を穿鑿を遂  
 差返レ様有之度レ深思召めて御下ケ被遊レ

一 凡 諸 品 手 永

宮本武藏平常所佩之脇差宮本又左衛門所秘藏  
 左ノ如シ



癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	上
丑	子	丑	子	丑	子	丑	子	丑	子	六十納音
樓	樓	壁	壁	照	照	波	波	金	金	
未	午	未	午	未	午	未	午	未	午	
癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	
酉	申	酉	申	酉	申	酉	申	酉	申	
鉤	鉤	柴	柴	寺	寺	燈	燈	泊	泊	
酉	申	酉	申	酉	申	酉	申	酉	申	
癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	
巳	辰	巳	辰	巳	辰	巳	辰	巳	辰	下
雨	雨	鐘	鐘	樹	樹	地	地	炎	炎	
亥	戌	亥	戌	亥	戌	亥	戌	亥	戌	
母指	母指	二指	二指	中指	中指	藥指	藥指	小指	小指	

上段之以幹而逆緣年之數當指而左右子丑算當支與納音合而何性可知之

雜錄彙卷之四終

蘇州府志卷之四  
甲子年  
乙丑年  
丙寅年  
丁卯年  
戊辰年  
己巳年  
庚午年  
辛未年  
壬申年  
癸酉年  
甲戌年  
乙亥年  
丙子年  
丁丑年  
戊寅年  
己卯年  
庚辰年  
辛巳年  
壬午年  
癸未年  
甲申年  
乙酉年  
丙戌年  
丁亥年  
戊子年  
己丑年  
庚寅年  
辛卯年  
壬辰年  
癸巳年  
甲午年  
乙未年  
丙申年  
丁酉年  
戊戌年  
己亥年  
庚子年  
辛丑年  
壬寅年  
癸卯年  
甲辰年  
乙巳年  
丙午年  
丁未年  
戊申年  
己酉年  
庚戌年  
辛亥年  
壬子年  
癸丑年  
甲寅年  
乙卯年  
丙辰年  
丁巳年  
戊午年  
己未年  
庚申年  
辛酉年  
壬戌年  
癸亥年  
甲子年  
乙丑年  
丙寅年  
丁卯年  
戊辰年  
己巳年  
庚午年  
辛未年  
壬申年  
癸酉年  
甲戌年  
乙亥年  
丙子年  
丁丑年  
戊寅年  
己卯年  
庚辰年  
辛巳年  
壬午年  
癸未年  
甲申年  
乙酉年  
丙戌年  
丁亥年  
戊子年  
己丑年  
庚寅年  
辛卯年  
壬辰年  
癸巳年  
甲午年  
乙未年  
丙申年  
丁酉年  
戊戌年  
己亥年  
庚子年  
辛丑年  
壬寅年  
癸卯年  
甲辰年  
乙巳年  
丙午年  
丁未年  
戊申年  
己酉年  
庚戌年  
辛亥年  
壬子年  
癸丑年  
甲寅年  
乙卯年  
丙辰年  
丁巳年  
戊午年  
己未年  
庚申年  
辛酉年  
壬戌年  
癸亥年

蘇州府志卷之四  
甲子年  
乙丑年  
丙寅年  
丁卯年  
戊辰年  
己巳年  
庚午年  
辛未年  
壬申年  
癸酉年  
甲戌年  
乙亥年  
丙子年  
丁丑年  
戊寅年  
己卯年  
庚辰年  
辛巳年  
壬午年  
癸未年  
甲申年  
乙酉年  
丙戌年  
丁亥年  
戊子年  
己丑年  
庚寅年  
辛卯年  
壬辰年  
癸巳年  
甲午年  
乙未年  
丙申年  
丁酉年  
戊戌年  
己亥年  
庚子年  
辛丑年  
壬寅年  
癸卯年  
甲辰年  
乙巳年  
丙午年  
丁未年  
戊申年  
己酉年  
庚戌年  
辛亥年  
壬子年  
癸丑年  
甲寅年  
乙卯年  
丙辰年  
丁巳年  
戊午年  
己未年  
庚申年  
辛酉年  
壬戌年  
癸亥年

